

「中央アジア プラス 日本」に思うこと

「中央アジア プラス 日本」対話 第10回東京対話

2017年8月31日

明治大学国際総合研究所フェロー 川口順子

日本と中央アジアの国交樹立25周年にあたる今年、「中央アジア プラス 日本」対話 第10回東京対話において、スピーチをする機会をいただいたことを大変光榮に存じております。

私が外務大臣を務めましたのは今から約15年前で、その時にこの枠組みを立ち上げたわけですが、私は、これを中央アジアの国々の外務大臣及び関係者と一緒に立ち上げたと強く感じております。まさに、パートナーシップが基にありました。

この構想を抱いた端緒は、以前キルギスの大統領顧問を務めた田中哲二さんに2003年夏に中央アジアの状況を伺ったことです。一部の中央アジアの外務大臣とは、構想を事前にお話をし、概ね賛成していただきました。しかし、中央アジアと日本の外務大臣が一堂に会するのは時間的に容易ではなく、いつ、どのような形でスタートさせるかが問題でした。2004年8月に第一回の外務大臣会合を開催することができた直接のきっかけは、当時行われていた「アジア協力対話」のリトリートの会議の中で、アルファベット順で日本“J”の隣にカザフスタン“K”の外務大臣が座ったことでした。難しい議論の最中に、隣のトカエフ大臣から、メモを渡されました。その紙には英語で、「あなたの名前は漢字でどう書くのか」とありました。早速答を書いて大臣に渡すと、直ちに紙が戻ってきました。見ると漢字で私の名前がありましてびっくりしましたが、トカエフ大臣が中国語の専門家だと聞いて納得が이었습니다。そうした息抜きを通して親しくなったので、コーヒープレイクの折に「中央アジア プラス 日本」開催の相談をしたところ、「8月にCACO (Central Asia Cooperation Organization、中央アジア協力機構)の会合がカザフスタンで開かれるから、その直前か直後に開催するのがよいのではないか。他の国には自分が話をするから。」と言って、調整をしてくださいました。立ち上げの過程で、国籍

は違って同じ目的に向かっての行動が人と人のつながりを深め、そして国と国の間のつながりを深めるという充実感を味あわせていただきました。

「中央アジア プラス 日本」を立ち上げたいと思った理由はいくつかあります。

まず、親近感があります。申し上げるまでもないことですが、中央アジア、シルクロード、西域といった言葉は私たち日本人には、多くの思いをもたらす言葉です。ある方の表現を拝借すれば、「遺伝子がうづく」言葉です。仏教、技術的に優れた文物、楽器などがシルクロードを経て日本に入り、日本に大いなる刺激を与えました。

第二に、中央アジアが世界の平和と安定に果たしている役割の重要性があります。当時世界の平和と安定にとっていくつかの大きな問題がありました。9.11 やアフガニスタンに見るようなイスラム過激派の動きもその一つでしたし、イラクの復興もなかなか進まず、宗派間の争いやテロが続いていました。中東和平もずっと超ド級の課題でしたし、イランの核開発問題も、大きな問題でした。外務大臣として、それら問題に取り組む中で、ユーラシア大陸のど真ん中にある中央アジアの地域が平和で安定していることが、日本にとっても、世界にとっても極めて重要なことなのだと身に染みて感じていました。この地域をテロの温床にしてはなりませんし、地域紛争の場にしていけません。

過去の歴史を考える時、私たちは、中央アジアを舞台として多くの国々が戦ってきたことに気づかされます。ロシア人が「タタールのくびき」と名付けた、モンゴル人が制覇した時期もありましたし、「グレート・ゲーム」と呼ばれる、英国とロシアの間での権益獲得の争いもありました。ソ連邦崩壊までの間、中央アジアはソ連の一部でした。過去とは形は異なると思いますが、今後も中央アジアを舞台として各国が影響力を持とうとするでしょう。特に、中央アジアは資源エネルギー確保の観点からも重要度を増してきています。中央アジア自身にとっても、日本にとっても、世界にとっても、中央アジアが特定の国の覇権のもとにあるのではなく、自立して、平和裡に発展していく存在であることが大事です。

第三に、中央アジアの平和・安定は経済の順調な発展と表裏一体です。当時は、ソ連邦崩壊後約 10 年を経過した時点でした。市場経済に慣れていない国々の、特に資源に恵まれない国の国づくりは困難な道筋でした。日本も「人」以外には資源のない国であり、かつて、苦労を重ねながら経済を発展させました。自らのこの経験に基づき、

経済発展を目指す国々を支援してきた実績があります。しかし、日本が高度経済成長を遂げた1960年代とは異なり、今は発展を目指す国の数がずっと多く、従って競争も激しいのでより大変です。

経済発展は、広域市場のもたらす規模の利益を享受できれば、有利です。そのためには、地域の国々の強い協力関係が必須です。水、交通網、環境問題、麻薬の撲滅などは、一国で取り組むよりは、地域全体で取り組むことでより大きな成果が得られます。

日本は、中央アジアの国々の独立以降、それぞれの国の努力をずっと支援してきましたが、それだけでなく、地域協力を支援することによって、地域の安定と発展により大きな貢献ができるでしょう。

これが当時私の脳裏にあったことでした。

その後、この共に作った対話が、政府間だけのものではなく、民間企業や学界を含んで大きく発展し、枝や葉が見事に茂っていることは大変うれしいことです。

以前、タジキスタンのラフモン大統領を表敬した時に、タジキスタンには水力があるので、日本企業にもっと投資をしてほしいと要請がありました。「日本企業へはあちこちから投資誘致があるので、タジキスタンの状況を日本の企業にもっと知らせる努力が必要だ」とお返しした記憶がありますが、今年2月に日本で行われた「中央アジア プラス日本」ビジネス対話に際して、中央アジア各国のビジネスチャンスについてプレゼンテーションが行われたと聞きました。ビジネスを通してより大きなウインウインの関係ができると素晴らしいと思います。

また、2004年の第一回対話において、今後三年間に1000人以上の研修生を受け入りたいと表明しましたが、結果的には日本は約束を上回る1200人以上を受け入れました。また、独立から2014年度までに、9154名受け入れたという実績もあります。

世界は国際政治の観点からは、北朝鮮の核やミサイル開発の問題も含め、以前よりも混迷を増したように見えます。また、経済の面でも、ICTの発展をどのように一国経済に取り込むか、気候変動問題にいかに対応するか、エネルギーの供給および需要構造の変化にどのように取り組むかなどの難しい問題が山積しています。変化のスピードはま

すます速くなっています。これらの問題は日本自身も現在真剣に取り組んでいる問題ですが、共に取り組むことの意義は大きいと思います。

今日のテーマは、「日・中央アジア関係の今と未来を展望する」ですが、今年5月に開かれた第6回外務大臣会合の共同声明を、先日読みました。その内容は、外交関係樹立から25年の歴史を語るに相応しい、充実したものであると思いましたが、また、「中央アジア プラス 日本」の枠組みとして、現在国際政治・経済が直面している新しい問題にいかに対応していくかについて、明確な指針を出していると感じました。そして、「中央アジア プラス 日本」が将来のどのような課題に対してもダイナミックに取り組んでいける枠組みだという確信を持ちました。

関係の皆様これまでのご努力に深く感謝を申し上げ、「友好と相互信頼に基づくパートナー」として、平和と発展の道を共に歩んでまいりましょうと申し上げてスピーチを終わらせていただきます。

以上